

イギリス便り (六)

寺田貞次

先づ協會の設備と云ふものは大略此の位で、倫敦の地學協會に比べると勿論小規模ではありますけれども、藏書の如きも能く選擇されて居り、例へば致に於ては少くとも利用上に於ては無量な藏する倫敦地學協會も選ぶ處がない譯に思はれ、現今主任は商業地理の大家である G. G. Chisholm 氏で Dr. M. I. Newbain 女史之を輔け、協會の目的は完全に遂行されて居ます、協會の事業の一となつて居る公開の講演會、並に會員の研究機關たる講演會の如きも、最初から預定をつくつて、盛に催されて居り、自分も其の都度出席して觀しましたが、公開の講演會は National Assembly と云ふ公會堂で、午後の八時から催され、講題は旅行談、探險談が多く、西藏の語や、我が臺灣島の話などもありました、何れも幻燈を使用して説明されます、日本あたりでは斯る種類の講演では聽講者を喚起しないと思はれますにも不拘、いつも多數の聽衆のあつたのを見ると、英人は尙斯る方面に多大の趣味を有て居るものと觀察され、小會の方は協會内で催されるので、會員のみの集合で、従て少しさみしい様な感もありましたが、新研究を續々發表し、互に圖論する處は、たのもしく考へられました、此協會の催許ではありませ

ぬが、自分の觀た、範圍で申しますと、歐洲の學會は少しでも新たに調査した處は續々と云ふ會發表する様で、日本では集會の講演と申せば、前人未聞の新研究調査とのみ心得て居ますが、當地は必ずしもそうでなく、一度會員仲間に發表して互に評論を受け、尙研究の資に供する手段の様に考へられました、講演後には會員互に遠慮なく意見を發表して論評します此の邊は學術研究會として當を得たことでもあり、又講演會の目的をも達して居ること、考へました、協會の藏書は倫敦の地學協會も同様で、一般の縦覽に供して居り、便其上貸出の制をもつて居ます、Aberdeen 其他に支部をも設け、時々圖書の交換をなし、公衆の便を計て居る様でした、協會からは機關雜誌 Scottish geographical magazine を發行します、Newbain 女史の骨折で編纂されるもので、Newbain 女史は熱心な研究者で著述は却々多くあります、經濟を主とした人文地學者だけに其の編纂に成る雜誌は、倫敦地學協會から發行する、Geographical Journal に比べますと、人文的方面の記事論説が多く、Scottish geographical magazine の一特色として趣味を深うすゝ次第であります。

University of Edinburgh.

次に大學を觀るに University of Edinburgh では地學は矢張り史學と同じ Faculty of Arts に屬して居り、教室は本館内に在り、Oxford & Cambridge に觀る様な中庭廻廊式建築物の西北隅が之に充てられ、史學や心理學教室の上部に當り建築物の最上部を占めて居ます、石造の古い建物で、奇麗ではなく階段も狭く暗黒で陰鬱ではあります、設備の點に於ましては必ずしも不備でない、別に他の大學の様に Institute など銘はうつてないけれども研究室は都合四室設備してあります、教室が一つ、研究室一つ、講義室二つと云ふわけで、丁所階段を上り詰めた正面が教室で、方二間半位の小室、中央に机を置き、傍に書棚一個を備へて居る、室が小さい上に各教授同室であるから聊か不便の感がある、助手なども置てないから、教室の整理、講義の準備等は殿めしい正服をつけた小使が万端を處理して居る、其の隣りは講義室で當教室中普通用ゐて居る室である、たいぶ廣大な室で、入口の左側の壁に長大な黒板を備へ、其の前に教壇を置き傍に書棚一個備へてあり、學生机は階段式に設備されて居る、教壇は長さ約一間、抽出を備へ、歐洲諸校普通に觀る原稿臺を置いて居る、書棚には教授用、參考用の書籍を貯へ、教冊づゝ準備し學生の借覽に供して居る、目的が上の様であるから一般地理の教科書類や、極く普通の良書を集めて居るのみで、チズム教授著、商業地理とか、ニュービギン博士著、Physical Geography の類に過ぎない、地圖掛は黒板の右側と室の三方の壁上に裝置され、滑車作用で昇降し得る様に

オギリス便り

し、地圖は之を吊すにも適し、又ペンもて張りつくるにも適せしむ、黒板の上部には英國殊にスコットランドの大圖を備へて居る、然し平素は巻き上げ得る様に裝置されて居る、此の地方圖の大圖を備ふる事は、歐洲の諸校共通に觀る處で、獨逸柏林大學地學教室の如きも、同様に獨逸の大全圖が常に掛けられて居る、英國は冬期日が短から電燈使用の機が多い、従て電燈の設備はよく出來て居る、教壇上には卓上電燈を備へ、自由に位置を變へ得るに適せしめ、天井には數個の電燈を付け、使用上便宜部分的に點燈又は消燈し得る様に設備して居る、講義には歐洲諸校に見ると同様、幻燈を使用する事が多い、幻燈機は大一小兩個を備へ、小機は之を教壇上に置き、黒板上の白布に映畫せしめる様にしてある、簡單で然かも教授上至極便利である、大きい方の機は別の裝置で特設の白布にうつす様になつて居る、暗室にする裝置は獨逸邊では電氣裝置が多いが、此處のは滑車作用で、黒布を四方の窓、並に天井の明り取りをおほふことになつて居る、尙教室には歐洲、殊に英國に於て甚しいと思はれる周壁裝飾用の片額が非常に多い、入口の直ぐ右側の壁にはチズム教授の大きな寫眞が掲げてある、同教授は既に老齡退隱せられ、其の記念として學生共の掲げたものである、手に巻紙をもてる半身像で、殿めしく教室内を睥睨して居られる、當教室最初の教授の記念として意義あるものである、George G. Chisholm, M. A. B. Sc. First Lecturer & Reader in Geography, Edinburgh University 1908-1923. 然し其の他は或はアルプス、北亞米利加、英吉利、巴奈馬運河、等の淨出標

第五卷

第五號

四五

五九

本や、英島の古圖、Edinburgh 市街圖等で、餘り趣味も引かず、殊に教壇に對する壁にはアルプス全景が一面に掲げてある、Oxford 大學では此の圖が電燈の笠に利用されて居たし、此處では全く室の贅乏かくしに使用されて居り、反てなきに勝る様な氣を生ぜしむるのは遺憾であつた。

此大講堂の西に隣りて研究室がある、大小二室に別れて居り、小室の方は一種の準備室で、一個の書棚の他に地圖額抽出付(幻燈用種板(magic lantern slides)箱も備へて居るに過ぎない、其の奥の室は廣大で研究室(Laboratory)である、側壁は全部硝子張の書棚になり、地學に關する諸國の雜誌を初め地學研究上重要な各國の資料並に經濟地理研究上の資料たる各種産物標本等も蒐集し、別に掛圖入れ一個を備へて居る、三方硝子張の丈の高い箱で掛圖は之れを吊して保存し得る様にしてある、Cotta 製の從來の掛圖の如き表面がゴム質と云はんか、濕潤なる本邦などにては時に粘着して、保存上非常の困難を経験した自分には掛圖入れとして、適切の方法と考へた、室の一壁には小黒板を掛け黒い革張の上品な卓子が數脚置かれて居る、地學演習の類は此の室を使用し、試験の如きも此室で行はれて居た此の室の西隣に尙一室在る、之も廣大な室で、黒板を備へ學生用机を多數準備して居る事は普通の教室と異らない、然し此の教室は餘り使用されて居なかつた、尙申すのを忘れましたが、地球儀は何處の地學教室でも同様、此處の教室にも備へてあり非常に大きなもの一個を教壇の傍に設備し、研究室には小形の各種地球儀並に Black globe をも備へてありました、此の地

學教室は現今既に隱退されて居ますけれども、尙商業地理として、英國中唯一の大家と一般に稱して居ります夫の G. G. Chisholm 教授が最初の Reader として營まれたもので、先生の御年がたつと同様教室もだいが古びては居りましたけれども、講義室としては便宜に出來て居ます、現今の Reader は Alan G. Ogilvie, M. A. B. Sc. といふ少壯教授で、約三年前 Oxford から赴任され、以前から居られる Alice B. Linnie 氏と共に教授の任に當つて居られ、Ogilvie 氏は普通の講義として Physical geography を其の後半に Economic Geography として講ぢられ、Economic Geography は地學科の學生許でなく、他科の學生も聽講するので、盛況を呈して居ました、Prof. Linnie 女史は歴史地理の専門で、地學の歴史並に Historical Geography を講じて居られ、隱退の Chism 先生も尙講師として指導の任に當つて居られ私の居りました時は Economic Ethnography と云ふ題で、春秋二期に渡つて講じて居られました、どこ迄も研究的態度で極く嚴格な教授振ではありますが、又夫だけ懇切な點の深いのは敬服の他ありませんでした、要するに Edinburgh 大學の地學教室は研究室として、相當の設備を有して居り、教室も古いながらに便宜に出來て居りますが、唯一つ遺憾に思ふのは、教授室が唯一つより無く、自然教授は適當時間以外には教室に止まつて居ないので、折角の研究室も常に有名無實の感がある事でありました、然かし Chism 教授を初め、其他の教授諸氏も、徒らに自然地理の方面のみ流れず經濟的方面に重きを置き人文的研究を主眼として居られる點は自分共

の愉快に思つた處で、此の教室の特徴と申してよからうと考へて居ます。

Royal Highschool

Edinburghには大學の地學教室の他に、もう一つ之に類似の教室が在ります、即ち Highschool の地理教室で、私は一日同校を訪ひ、教室を縦覽教授場をも拜見しました、單に一ハイスケールの地理教室とは云ひながら、設備が能く整備して居ました、教室は學校建物の西端の一部を之に充て、教室の他に準備室をも備へ、小さいながらに獨立教室になつて居り、教室は相當に廣く、入口の直ぐ右側に黒板を備へ、長大な講壇を置き、學生の机は階段式にして、一人一脚づゝに別たれて居る、同壁には裝飾を兼ねてか、地圖や模型が置いてある、黒板の上に加奈陀圖、並にスコットランド圖を、右側の壁には、歐洲、加奈陀、Edinburgh 地方の掛圖をかけ、當地方の地形模型を置き、左方の壁には小形の世界圖をかけ、後方の壁には標本箱を備へ、地理に關する、參考書や、學生共が蒐集した産物標本などを陳列し、伊太利半島の浮彫をかけて居た、寒暖計の他、氣壓計などを備へて居る點は、日本など、異て何處にも眼につく處で、こゝ云ふ方面の注意も一般に盛である事が察せられる、當教室の主任は Mr. T. S. Muir と申し、熱心な研究家で、Edinburgh District (Johnston 發刊) 其他歐洲地理等の著がある、此の教室は實にミューンル教授とエドミンズラ大學のチズム教授との盡力で出來たもので(一九一五年)、チズム教授は此の校の出身であり、

イギリス便り

地理教室の不備を概し遂に此の完備を見るに至つたので、チズム教授の此の教室設立に對する意見は、教室完成式の當日同教授の試みられた演説でよく察する事が出來ます、(スコッチェス、シオグラフィカル、マガヂーン所載) 私の御伺した時はミューンル教授は氏の旅行された加奈陀地方に付て話して居られ、旅行上の經驗を基礎として、實際的に説明を加へ、最後に幻燈を使用して懇々と教示して居られた、幻燈機は教壇の直ぐ傍に當置し、反射作用で後方黒板側の白布板に映ずる様に裝置してある子供に教へる地理の教室としては完備したものと申してよろしい、却々面白いので、引きつゞき次の時間も拜聽しましたが、次の時間には地理の實習とも云ふべきもので、前の時間に繰り出しておかれた問題に付て實習せしめるので、前の時間に筆記せしめた經緯度に依り地圖上で之をさがし、其の經緯度に相當する處の地名を練習帳に記入せしめ、教授は室内をまばつて生徒の様子を視、互に練習帳を交換して點數をつけ、最後に各生徒は名簿の順に自分の得點を發表し教授は之を自分の手帳にひかえ、又次回の問題を課して解散するのであつた、教授法の可否は知らず、面白く拜聽した、

Johnston 地圖製作所

Edinburgh に於ては、地學に關係あるものは、既述の地理教室の他、地圖製作所を觀察しなければなりません、御承知の通り、二大社が在つて、之が製作研究に従事して居ます、先づジョンストン社の方から申し上げます、ジョンストン社は Edinburgh Johnston

市の東北部に當り、Edin Place, Easter Road. といふ處に在り
ます。Alexander Keith Johnston といふ人の創設。昨年（一
九二四）で丁度一百年に相當する由。

社は赤い煉瓦造の古風なもので、一は創設者 Johnston の住
宅、其の隣にて接して在る同じく赤煉瓦二階建の長大な建物が
製作場で、門前に大きな時計を備へ、下に W & K Johnston と
大書してあります。懇切な案内を得て原圖製作室から、銅板彫
刻室、石板室、印刷室、寫眞室、パンクノート印刷室、調製室並
に地球儀製作室に至る迄、詳細に鑑覽しました。原圖室では製圖
の如何にも細密な仕事で、正確な訂正等非常な手数を要する處
から、銅板上に彫刻する處、質の緻密な石灰石板 (Lithographic
stone) 上に原圖を畫く處など技術者の手を休めて迄、説明して
くれ、寫眞室では大きな寫眞機をうごかして、撮影法を示し、原
板のつくり方迄實地に付いて説明してくれ Manchester college
に居る上島と云ふ日本人が一度縦覽に來たことがあるなど話して
居た、印刷室の規模の大なる地球儀製作室や掛圖の仕上場も
趣味を以て觀察することが出來た。丁度本年は創設者 A. K.
Johnston 博士の壹百年に相當するので、記念に、*Johnston* といふものを
つくつたと云ふて、百年記念の冊子を惠與された、ジョンスト
ン博士の肖像寫眞等も挿入してあり、好記念物である、自分け
其の偉業を忍ぶの餘り、例の好奇で、墓所かたづけて見た處、
餘り忽然の間に少し困て居た様であつたが、早速調べてくれた
幸違くもなかつたから二三日たつて參拜して見た。(一九二四年
十一月廿四日)

墓は市の南部なる Change Cemetery に在ります、日本の墓
地と異て歐洲の墓域は能く整理してありますからして、容易に
發見する事が出來ます、墓域の正門を入り、直ぐ右の廣い道
を西し約百七十歩、道を左にとり、更に三十八歩行た處左側に方
一間を劃して石もて圍の綠草濃かに生じて居る處は、ジョン
ストン家の墓で、後に高一間半許の白色花崗岩製の十字形碑が二
重の臺石上に建てられて居る、歐洲の墳塚に一般に觀る墓が深
く臺石の邊りをおぼけて居た、碑には文字を刻して居ないが、
臺石を觀ると其の表面に左の如く刻し、

Alexander Keith Johnston.

C. I. D.

Died 9th July 1871.

aged 67

Keith Johnston.

Died at Behobanhs South Africa.

28 th June 1879.

ages 33

下の臺石に

Margaret Keith Johnston.

Died 26th July 1893

aged 83.

尙臺石の側面には一族の銘を刻してあつた、ジョンストンの
地圖と稱して、英國での最もよい地圖として世に稱せられるも
も氏の力に依るかと思ふと追懷禁する能はざるものがあつた。